



兼子 勝氏に

勲三等旭日中綬章



昭和50年春の叙勲を元地質調査所々長の兼子勝氏がうけられたことは 所職員のみならず 関係者の等しく慶祝するところであります。昭和3年東京帝国大学の地質学科御卒業後 氏は約10年間北樺太石油(株)でオハ油田等の開発に当られ 昭和13年商工省入省後の約25年間の在官期を 主に地質調査所で過ごされています。昭和38年退官後は水資源開発公団 日本重化学工業(株)に御勤務現在は東日本石油開発(株)で御活躍中です。

氏の御事績は多方面に亘っていますが 在官中のことを主としてみたとき 第1は石油・天然ガスに関する御仕事でありましょう。東山油田の坑道掘り採油計画 郷津油田図幅調査 スマトラ油田の調査・開発 山形県下・北海道の天然ガス調査などが代表であります。昭和15年頃からの本邦ガス田の御研究は 長年月をかけまた優れた協力者もえて とくに水溶型ガス鉱床につき重点的に行なわれています。その結果 このタイプの鉱床が 油田地帯以外にも広く分布することとその実態微量ガス分析器の考案・使用 ガスとその付随水の地球化学的考察などを通じての鉱床賦存の予測技術の確立などを達成されました。昭和31年に氏はこれらの成果をもとに学位をえられています。水溶型ガスの生産はエネルギー供給源の大宗をなすものではないが 埋蔵量かなりの規模で予測でき 資源弱小国にとっては貴重な



兼子 勝氏

天恵であります。現在宮崎県等で新規の開発が進められています。

第2はウラン等核燃料と地熱資源についてであり これは 主に昭和28年から約10年の所長としての氏の御事績であります。わが国初の企としての核燃料資源の全国的探鉱の組織化にあたり 氏は所内外の多数の方の支援をえて 系統的な探査網を展開し 昭和30年には人形峠鉱床の一部が発見されました。この意義は世界的に重要な堆積型鉱床が日本にも存在するという注目すべき事実であり 以後 これら成果をうけて原子燃料公社(現動力炉核燃料事業団)が発足 企業化探鉱が継続されています。また 地熱について氏は 関係者とともに 一時座折的状态にあった研究のテコ入れを行い とくに岩手県松川では 物理的・化学的手法も加えた総合的調査を日本重化学工業(株)との共同研究で行ない 新技術開発事業団の支援も得 さらに御退官後もこのプロジェクトに参画されて 該地における商業的規模の発電成功に貢献されています。現在地熱の探査・開発が 通産省などの手で 全国的規模で行なわれていることは周知のとおりです。

以上は氏の足跡の一端にすぎませんが 氏が日本地質学会々長や国連の政府代表などを歴任されて 国内外に広い見聞や多くの知己をもたれ 日本の地学を国際的レベルに高めるためになされた氏の御努力に対し 叙勲の御慶を機に改めて敬意を捧げるものであります。

(燃料部)

現住所 藤沢市鶴沼桜ヶ岡1丁目7番10号
電話 (0466) 22-2915

